

熟練した開業助産師が行う母乳育児支援の特徴

Characteristics of the Supportive Care provided by an Expert Midwife during Breast Feeding

中本 朋子*

Tomoko Nakamoto

要旨

目的 本研究の目的は、熟練した開業助産師が行う継続的な母乳育児支援の特徴を明らかにすることである。

方法 熟練した母乳育児支援の実践家である開業助産師の家庭訪問に同伴し、母子および家族を対象にケアを展開する場面を参加観察した。訪問中の音声全てを録音し逐語録とした。母乳育児支援と思われる発話に着目し、ひとまとまりごとのケアに細分化した。細分化したケアについて、ケアの根拠を助産師にインタビューした。インタビュー結果をまとめ、聴き取りと解釈の妥当性を本人である助産師に確認し修正した。ひとまとまりごとのケアと根拠をカテゴリー化し、熟練した開業助産師が行う母乳育児支援の特徴を考察した。

結果 熟練した開業助産師が行う継続的な母乳育児支援の特徴は、①母子のアセスメントと健康管理のための働きかけ、②母親の能力を高める、③母子を常にペアとして捉える、④母親のリラクセーションの保障、⑤授乳を通して児の様子に注目し育児の楽しさが見出せるプロセスを支援、⑥長期のサポート体制を整える、の6つであった。

考察の結果、助産師は、「普段通り」の「母子一体の雰囲気」を把握していた。母親を導く方法として「わざ言語」¹⁾ が用いられていた。常に母親が主体であるように母親のペースを尊重しながら、母親が行う試行錯誤を保障していた。また、助産師は、母親とともに児を共同注視し²⁾ 児の欲求と満足感の受け止め方を共感することで母親の自立を促していた。また、母児の経過診断では、母親に不要な心配をさせないような発言がされ、確実に観察することで母児の安全に対する責任を負っていた。

キーワード：継続的、母乳育児支援、開業助産師、わざ言語、共同注視

I 序論

1989年世界保健機関(WHO)・国連児童基金(UNICEF)より「母乳育児成功のための10カ条」が発表された。わが国では、2007年(平成19年)に厚生労働省より「授乳・離乳の支援ガイド」³⁾ が発表された。その後、母乳栄養、母乳育児に関するテーマは、医療従事者向けの雑誌の特集としても多くとりあげられている。

看護師等養成所の運営に関する指導要領「助産師教育の基本的考え方、留意点等」⁴⁾ には「実習期間中に妊娠中期から産後1カ月まで継続して受け持つ実習を1例以上行う。」と示され、継続的なケアは、長年、助産師教育の要としてその重要性が示されている。

「継続ケア」について、竹原ら⁵⁾ は、「ケアを受けた女性が『ケア提供者を信頼でき、一貫したケアを受けられた』と感じられるようなケアを『継続ケア』として定義すべきなのではないか」と述べている。

しかし、実習施設の勤務体制によっては、「継続ケア」が、「複数のケア提供者グループのうちの誰かが妊産婦のケアをすれば良い」⁶⁾ という形となる。そのため 学生は、一人の助産師が、日々変化する母子の課題を、「女性とケア提供者が強い信頼関係で結ばれ」⁷⁾ たうえて、自分の責任のもとに診断し継続的なケアを実践する過程を学ぶモデルを描きにくい。

そこで、開業という形態で母子を継続して受け持ち、強い信頼関係を基盤としながら母乳育児を支援すると

* 山口県立大学別科助産専攻

いう開業助産師の支援のあり方をモデルにしたいと考えた。開業助産師の支援のあり方を明らかにすることで助産師教育への示唆が得られると考えた。

II 研究方法

1) 研究対象

熟練した母乳育児支援の実践家である開業助産師（母乳育児支援の経験9年）および研究協力者である家庭訪問先の母子1組。

2) 情報収集期間

2010年12月～2011年3月にかけて情報収集した。

3) 方法

- ①開業助産師が行う家庭訪問に同伴し、母子に対するケアの開始から終了までの一連のケアを参加観察し、ケア中の音声は、すべてを録音した。
- ②ケアの継続性、連続性を観察するために、後日、同じ母子への訪問に同行し参加観察した。
- ③ケア中の音声は、すべて録音した。（1回のケアの時間は、約2時間であった）
- ④音声は逐語録とし、助産師の母乳育児支援と思われる発話に着目し、ひとまとまりごとのケアを細分化した。
- ⑤助産師が、なぜそのケアを実施したか④の根拠を、逐語録をもとに想起してもらい、ケア選択の根拠を再度助産師にインタビューした。
- ⑥インタビュー結果をまとめ、研究者が聴き取った内容の解釈が妥当か否かを本人である助産師に確認し修正した。
- ⑦ひとまとまりごとのケアと根拠をカテゴリー化し、熟練した開業助産師が行う母乳育児支援の特徴を考察した。

3) 倫理的配慮

助産師および研究協力者の母子それぞれに対して、研究の趣旨、方法とともに、①研究協力は自由意志に基づくものである、②研究協力は、研究への同意後でも拒否できる、③研究の拒否により不利益を被らない、④個人情報保護に努める、という倫理的配慮を口頭、文書で説明し同意書に署名を受けた。

山口県立大学生命倫理委員会にて承認を得た。

III 結果

熟練助産師が実施した2回のケア場面の逐語録より、ひとまとまりごとのケアと根拠をアイテムとした。アイテムは65個であった。アイテムをカテゴリー

化した結果、開業助産師が行う母乳育児支援の実際より31のサブカテゴリーを抽出した。これを意味内容によってカテゴリー化した結果、【母子のアセスメントと健康管理のための働きかけ】【母親の能力を高める】【母子を常にペアとして捉える】【母親のリラクゼーションの保障】【授乳を通して児の様子に注目し育児の楽しさが見出せるプロセスを支援】【長期のサポート体制を整える】の6つが抽出された。（表1）

ケア中の助産師の発話を「」、サブカテゴリーを《》、カテゴリーを【】で示す。（）は、研究者が参加観察した状況から、語りや説明を補ったものである。

1. 母子のアセスメントと健康管理のための働きかけ

9つのサブカテゴリーがあった。《母体の復古状態の経過診断をする》では、「(昨日と比べて)悪露はどうですか」と母親自身が気づいた悪露の変化を問診するとともに排尿を促し、母親から受け取ったパットを直接観察していた。子宮底の触診は、乳房の観察のため母親が臥床したタイミングで一緒に観察されていた。膀胱炎症状、下腹部痛等、産褥期に頻度の高い症状を具体的に例に出し、《母親が気になる症状があれば言い出しやすいような雰囲気が作られ》ていた。また、「右の方が残る感じですか?」と《前回気になった症状を確認》していた。《食事の摂取の状況を聞き落とさない》では、会話の一部に語られた内容を聞き落とさず、「『実家ですごい食べた』というのはお腹が空いて食べたの? ストレス発散じゃくて?」とメンタル面の情報としても着眼されていた。《胃腸の調子に注意する》では、「胃の痛み」、「胃部の不快感」ではなく、「胃腸の調子」という表現で問診されていた。《児の全身状態の経過診断をする》では、検温、聴診、黄疸の観察（助産師の自宅に黄疸計を忘れたと、当日の午後再度訪問しチェック）、頭尾方向への全身観察、姿勢、臍の状態、体重測定がなされていた。哺乳力、尿の回数・尿量、便の回数・性状、腹部の膨満、排ガスの有無については、助産師が例をあげて確認する方法ではなく、母親から見てどうかを問診されていた。《児の体重増加に関する個別性を見抜く》では「今日は(体重が)増えました。」と体重が気にかかる様子の母親に対して、一時的な増減を気にしなくても活気、目の輝き、皮膚の張り等から事前に予測した通り、「今日は、体重が増えましたよ」という文脈で話し掛けられていた。《気をつけてほしいことを具体的にはっきりと説明する》では、便の拭き残しを母親に遠慮しな

いではっきりと伝え、具体的な拭き方を説明していた。

2. 母親の能力を高める

7つのサブカテゴリーがあった。《母親に自分自身の乳頭、乳房の感覚と感覚の変化をわからせる》では、授乳中に「奥から吸われているって感じじゃなくて、先って感じですか？先がチクチクというよりも奥の方がグイグイという方が…」と、母子ともによい状態で授乳できている時の感覚を母が感じとれるよう擬態語で表現していた。また、児の抱き方を変えたことによる乳房の変化を母親自身が知覚するため自分で触診するよう促していた。《母親の試行錯誤を認めほめる》では、(母親を急かさないように、物品の片付けに気がいっているような態度を装い、途中で母親に話かけないようにしながら)「そうしたら深く入るから、そうそうママも赤ちゃんも頑張った」と《母親の試行錯誤を認めほめ》ていた。《杓子定規な考え方に融通性を持たせる》では、ほとんどの発話が「うん、うん」「そうじゃね」「どうしようかねえ」と助産師自身の考え方が示されないのに対し、母親の思考が杓子定規になりそうな時には「『どの姿勢がだめ』とかはないですよ。そこはそんな風に考えなくても…」と助産師自身の考え方が示されていた。《体調の整え方を伝える》では夜間暖房や空気の乾燥、シャワー中の体の冷え防止等、自宅の暖房器具や使用時間帯、授乳する部屋の日当たり等も察知した上で、環境の改善による体調の整え方を説明していた。《不要な手出し、口出しをしない》では、母親の授乳行動全てに対して母親のペースに任せ、「うん、うん」とうなずきながら見守っていた。《児の様子を解釈して伝える》では「赤ちゃんがお休みするようだったら、チュクチュクになったら(お乳を)放して」と擬音を用いながら、児の様子を母親と一緒に注目して解釈し伝えていた。《時間、数値へのこだわりを外す》では、「また飲みたい時に(授乳を)しようか」と時間や数字を判断基準にしていなかった。

3. 母子を常にペアとして捉える

2つのサブカテゴリーがあった。《母と子だけの時間を尊重した態度を示す》では、助産師は、自分の存在が授乳の邪魔をしてはならないと考え、母親を正面から直視しない位置から見守っていた。「お二人目だからということではなく、この赤ちゃんの様子はどうか…」と第1子の体験が先入観にならないように、赤ちゃんは、どの子も同じようでも赤ちゃんのうちから一人一人違うという個性に関心が向くような声かけがされていた。側で観察する時には「側に座らせてもらっ

てもいいですか」と《授乳場面に踏み込むことの許可を得ていた》。

4. 母親のリラクセーションの保障

4つのサブカテゴリーがあった。《全身の情報を聞く》では、肩こり、冷え、温かみの様子を聞き、《タッチングにより母親の体をほぐし》ていた。また、助産師が母親を急かして《母親を緊張させない》ように、母親のペースを大切にし、ゆったりとした空気を壊さないような口調で話しかけ、話しかけても母親が助産師に気を使わないように《授乳場面に参加することの許可を得ていた》。

5. 授乳を通して児の様子に注目し育児の楽しさが見出せるプロセスを支援

4つのサブカテゴリーがあった。《児の欲求を解釈して伝える》では、「(お乳を探して) はあ、はあ、がすごいですね」と母親と同じ目線で児の様子を観察し、授乳のタイミングを知らせていた。「ちゃんとお目々開けて飲んでるね、おいしいね」と母親の立場、児側の立場を瞬時に交替し、双方の立場で語っていた。「(目を)閉じとるね。げっぷも出たし、気持ち良さそうよ。ねえ、ちょっと、心地よくなったよ。」と助産師自身が児の表情の発見が楽しいように《児の満足した様子を解釈して母親に伝え》ていた。「『おいしい』って言うよ。」と児との会話がなくても会話に見立てていた。「成長しておりました、すごく表情がいいですね。」と1回ごとの授乳とともに、経過の中で授乳という行為の結果を伝えていた。また、「口の動きが変わった。面白い。」では、母親が児の吸啜刺激と泌乳の関係に気づけるように《泌乳までのプロセスを楽しく伝え》ていた。

6. 長期のサポート体制を整える

5つのサブカテゴリーがあった。「1週間後に見に来てもいい?」と、《本人の意向を確かめ》るとともに、別の場面では「3カ月くらいまではね…」と短期、長期の見通しにより《短期と長期のめどを伝え》ていた。また、「(たまたま来所した舅に対して)お元気そうで…」と家族の様子を気にし「(父親に対して)気を利かせてくださるじゃないですか?妊娠中から特にねえ…」と《周囲の環境とサポート状況の把握》や、《出産前から夫の協力体制を整える》ことがされていた。また、退室時には母親の表情を見ながらゆっくりとした語りかけで「何かありますか、赤ちゃんのこととか、自分のこととか…」と、何かあれば何でも相談できる《心のよりどころとしての存在を示す》雰囲気があった。

表1. 熟練した助産師が行う母乳育児支援

カテゴリー	サブカテゴリー	アイテム (発話例)
1 母子のアセスメントと健康管理のための働きかけ	①母体の復古状態の経過診断をする ②(膀胱炎症状の有無、下腹部痛、排便の状況など問診しながら、) 母親が気になる症状があれば言いだしやすいような雰囲気を作る ③頻度の高い気になる症状の確認をする ④前回気になった症状の確認をする ⑤食事摂取の状況を聞き落さない ⑥胃腸の調子に注意する ⑦児の全身状態の経過診断をする ⑧児の体重増加に関する個別性を見抜く ⑨気をつけてほしいことを具体的にはっきりと説明する	<ul style="list-style-type: none"> ・(昨日と比べて) 悪露は、どうですか? ・お腹痛いとか?お通じは? おしっこも? 量も普通に? ・頻尿とか、おしっこがでる時に痛いとかもない? ・(前回と同じ)右の方が残る感じですか? ・食欲どうですか? (今までと) 同じ? ・「実家ですごい食べた」というのはお腹が空いて食べたの? ストレス発散じゃなくて? ・胃はもともと弱い?いつ頃から弱くなったって? ・赤ちゃんのことで気になるのは、おへそぐらいですかね? 眼やにはどう? ・今日は(体重が) 増えました。重くなったね。ほんとね。 ・…ちょっとここにウンチが残ってる。おしっこはそうでもないですけど、ウンチはかぶれる原因になるから。ここを上から下の方ですね、取っとかないと。 ・シャワーは、(浴室を) 暖かくしてね、周りをね。冷えるからね。
2 母親の能力を高める	①母親に自分自身の乳頭、乳房の感覚と感覚の変化をわからせる ②母親の試行錯誤を認めほめる ③杓子定規な考え方に融通性を持たせる ④体調の整え方を伝える ⑤不要な手出し、口出しをしない ⑥児の様子を解釈して母親に伝える ⑦時間、数値へのこだわりを外す	<ul style="list-style-type: none"> ・奥から吸われているって感じじゃなくて、先って感じですか? 先がチクチクというよりも奥の方がぐいぐいという方が…。 ・申し訳ないんですが、もう一度横になってください。 (乳房の状態が) すごい、いい。もう、これでいいですよ。(抱き方をかえると) 全然違うのわかるでしょ。 ・そうしたら深く入るから、そうそう、ママも赤ちゃんも頑張った。 ・「どの姿勢がだめ」とかはいいですよ。そこはそんな風に考えなくても… ・夜は、暖房消してるんですか? 朝起きて喉が痛いとか? ・うん、うん、 (笑顔でうなずき見守る) ・(赤ちゃんが) お休みするようだったら、チュクチュクになったら(お乳を) 放して。 ・また飲みたい時に(授乳を) しようか。

<p>3 母子を常にペアとして捉える</p>	<p>①母と子だけの時間を尊重した態度を示す</p> <p>②授乳場面に踏み込むことの許可を得る</p>	<p>・…… (笑顔を向けながら沈黙している)</p> <p>・お二人目だからということではなく、この赤ちゃんの様子をどうかな、と。</p> <p>・(授乳中の母子の側に) 座らせてもらってもいいですか？</p>
<p>4 母親のリラクゼーションの保障</p>	<p>①全身の情報を聞く</p> <p>②母親を緊張させない</p> <p>③授乳場面に参加することの許可を得る</p> <p>④タッチングにより母親の体をほぐす</p>	<p>・痛みは、なあい？</p> <p>・うん、うん、大丈夫。うん、うん、〇〇ですよねえ…。</p> <p>・…ここに(足を置く) 台を置いて、この方が楽？</p> <p>・(タッチしながら) ちょっと、足を伸ばして、ぶらん、ぶらん、ぶらん、ぶらんね…。</p>
<p>5 授乳を通して児の様子に注目し育児の楽しさが見出せるプロセスを支援</p>	<p>①児の欲求を解釈して伝える</p> <p>②児の満足した様子を解釈して母親に伝える</p> <p>③授乳は、楽しい価値ある出来事であるという雰囲気を醸し出す</p> <p>④泌乳までのプロセスを楽しく伝える</p>	<p>・口が動いてる…、(お乳を探して) はあ、はあが すごいですね。</p> <p>・ちゃんとお目々開けて飲んでるね。おいしいね。</p> <p>・(目を) 閉じとるね。げっぶも出たし、気持ち良さそうよ。ねえ、ちょっと心地よかったよ。</p> <p>・「おいしい」って言うよ。</p> <p>・成長しておりました、すごく表情がいいですね。</p> <p>・口の動きが変わった。面白い。</p>
<p>6 長期のサポート体制を整える</p>	<p>①本人の意向を確かめる</p> <p>②短期と長期のめどを伝える</p> <p>③周囲の環境とサポート状況の把握</p> <p>④出産前から夫の協力体制を整える</p> <p>⑤心のよりどころとしての存在を示す</p>	<p>・1週間後に見に来てもいい？</p> <p>・そうよねえ、3カ月くらいまではね…</p> <p>・(たまたま来所した舅に対して) お元気そうで…</p> <p>・(父親に対して) 気を利かせてくださるじゃないですか？ 妊娠中から特にねえ…。</p> <p>・何かありますか、赤ちゃんのこととか、自分のこととか…</p>

IV 考察

結果をもとに、熟練した助産師の継続的母乳育児支援の特徴を考察した。

1. 「普段通り」「母子一体の雰囲気」を把握する

授乳場面の情報収集には、母親が「観察されている」と感じないような配慮があった。妊娠中から継続している関係であっても産褥早期は繊細になりやすいという母親の特性を踏まえた配慮がされていた。「母親から見た24時間が大事」と母親の日常性を壊さず「普段通り」を把握するために、使用する物品の準備を装い、なるべく話しかけないようにしながら、母子一体の雰囲気を観察していた。母子一体の雰囲気をつかむ行為は、母親への気遣いとともにながら「達人の実践家は、状況を理解して適切な行動と結び付けていく際に、もはや分析的な原則（ルール、ガイドライン、格率）には頼らない。…中略…いまや状況を直感的に把握し、問題領域に正確にねらいを定める。」⁸⁾に相当すると考える。

2. 母親を導くために「わが言語」¹⁾を用いる

母親自身が、児がうまく吸啜できているか否かを体感で判断できるように「どんな感覚か、乳頭のどこにその感覚が発生しているか」が問診していた。

母親が辿り着く目標を感覚で示し、母親自身がそれを知覚できるような抱き方を促していた。また、母親自身が良い吸啜の目標となる感覚を自分の知覚とすり合わせながら試行錯誤できるように説明されていた。助産師の見立てと母親の感覚をすり合わせに用いられる表現は、擬態語や擬音語を用いた日常的でわかりやすい表現であった。「科学言語のようにある事柄を正確に記述、説明することを目的とするのではなく、相手に関連ある感覚や行動を生じさせたり、現に行われている活動の改善を促したりするときに用いられる」わが言語¹⁾であると考えられる。

交替勤務の場合、専門用語を用い簡潔明瞭な情報の伝達が必要となる。しかし、乳房の状態を詳細に言語化することはしばしば困難であるため、母親は、勤務交代のたびに観察され、同じことを問診される。また、ダイナミックな進行性変化が起きる時期には、看護者各々が「今の状態」に基づく指導を行い、母親を混乱させることになる。わが言語¹⁾を用いることで、看護者は共通した視点で「関連ある感覚」がつかめるように支援することができる。

3. 母親が主体であり、母親のペースを尊重し自立を促す

助産師は、不要な手出しや声かけは行わなかった。決して母子を急かすことなく、ゆったりと母子の時間と空間を見守るという心構えを持っていた。母親が行った試行錯誤に対し、うなずきながら傾聴し、評価を避け、母親の試みを承認する態度を示していた。「ちょっと浅飲みのように見えても実はうまく吸えていることがあり、母親にとって一番いいところが良いところ」であると常に主体は母親であるという態度が示されていた。

母親自身が考え選択できるように、最初から助産師の意見を示すことなく「どちらでもいいし…」と母親の主体性を尊重していた。しかし、考えすぎて「〇〇はダメ」「…ねばならない」というと杓子定規な考え方になりそうな時は、助産師自身の考えが示され、母親の思考が柔軟になるように方向修正されていた。助産師は、一貫して受容的な態度でありながら、静観すると母親が不利益になると予測される場合、助産師自身の考えが述べられていた。母親は考え方の修正を受けることによって、考えすぎに気づくことができる。

支援者が不在でも母親が主体的に試行錯誤し、児の抱き方を変えたことによる乳房の変化が分かるように触診方法を伝え、セルフチェックの方法が伝えられていた。「支援者が不在でもできる」という目標の掲げ方は、母親の自立を促すことになる。

母親が児の欲求に気づき、児の欲求を満たす授乳ができ、満足した児の様子を見て母親が達成感をもてるように、助産師は、母親と児に向ける視点を結合させ共同注視²⁾の関係を形成していた。初めて出会ったその子に応じた世話を一緒に見つけようという連帯感が形成されていた。

環境調整においては、現在の母子の生活環境をもとに産褥早期の留意点、その時々々の気候に応じた室温、湿度、夜間暖房の使い方等が具体的にアドバイスされ、母親が思考錯誤して気付く内容と、明瞭な助言が役立つ内容が区別されていた。

4. 母親を不安にする発言を避け、経過診断に責任を持つ

助産師は、児の状態を観察しながら母親に問診していた。母親は、問診されることで児の観察ポイントを身につけることができる。黄疸の観察では黄疸計を置き忘れてきたと母親に告げられ、再訪問によって観察されていた。気にかかる状態であったと推察する。しかし、「児の黄疸が気になるので、午後、再訪問したい」という表現はせず、自分の責任において日々の経過診

断が確実になされ、生理的な経過であることが診断されていた。アセスメント内容を逐一母親と共有するのではなく、母親を不安にする発言を避けていた。

5. 助産師教育への示唆

ベナーは、「達人の実践内容をつかむことは簡単ではない。なぜなら、達人は、全体状況を深く理解したうえで動くからである。」⁹⁾と述べ「すぐれた臨床実践を系統的に記録することが、臨床知識の開発では最初の段階」¹⁰⁾と述べている。「看護過程と決定分析の両者の限界は、熟練した実践に関する課題の困難さ、相対的な重要性、理論的根拠、および解釈を含んでおらず、文脈、志向性および解釈を含まずには適切な把握が行えない」¹¹⁾と述べている。このことより、教員、臨床指導者は、すぐれた実践を記録するとともに、学生とともに熟練した実践の現場で共同注視し、学生が主体となって助産過程では十分説明できないケアの卓越性を発見するプロセスをたどることが重要と考える。「助産師が母親に行った実践」が、「教員が学生の自立を促す教育」に相当することが示唆された。

V 結論

熟練した助産師のケアは、「普段通り」の「母子一体の雰囲気」を把握していた。母親を導く方法として「わざ言語」¹⁾が用いられていた。常に母親が主体であるように母親のペースを尊重しながら、母親が行う試行錯誤を保障していた。また、助産師は母親と児を共同注視し²⁾児の欲求と満足感の受け止め方を共感することで母親の自立を促していた。また、母児の経過診断においては、確実に観察することで母児の安全に対する責任を負っていた。「助産師が母親に行った実践」が、「教員が学生の自立を促す教育」に相当することが示唆された。

謝辞

授乳という母子の大切な場に同席させていただき、参加観察をご承諾くださいましたお母様、快く何度も研究に協力してくださいました助産師に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 生田久美子、北村勝朗：わざ言語、28-29 慶応義塾大学出版会株式会社、2011.
- 2) 佐伯胖：教育講演 学習力を育むー現場での生きる実践知とはー、日本看護学教育学会誌, 16 (2)

39-47,2006.

- 3) 授乳・離乳の支援ガイド：厚生労働省, 2007.
- 4) 看護師等養成所の運営に関する指導要領（平成13年1月5日健政発第5号）
（最終改正：平成24年7月9日医政発0709第11号別表2.）
- 5) 竹原健二、北村菜穂子、三砂ちづる、箕浦茂樹：「継続ケア」とはどのようなケアなのか？ 継続ケアに関するレビューの結果より、助産雑誌 62 (5) ,443-446,2008.
- 6) 同 446
- 7) 同 446
- 8) パトリシア ベナー著、井部俊子、井村真澄、上泉和子訳：ベナー看護論, 21-24, 医学書院,1992.
- 9) 同 22
- 10) 同 25
- 11) 同 27

